

ザンビア便り（第32回）
（世界有数の人造湖、カリバ湖）

ザンビアの南の端、ジンバブエとの国境に位置するカリバ湖、1960年前後に作られた世界でも有数の規模を誇る人造湖です。ザンベジ川の中流に位置し、ビクトリアの滝から流れ込む、風光明媚な観光地であり、また漁業、水力発電の拠点でもあります。ルサカから南東に3時間ほど走るとシアボンガという湖畔の街に到着しました。2月の終わり、私はJICA、日本企業関係者ととともにこの湖を訪れました。その目的は湖で行われている魚の養殖場の視察と、カリバダムでの水力発電所の視察でした。



1. 魚の養殖

ザンビアは水資源に恵まれ、多くの湖があります。そこでは淡水魚、主にティラピア（地元ではブリムとよばれる鯛の一種）タイガーフィッシュ、ザリガニなどがとれる。しかし、最近の乱獲により漁業資源は枯渇に向かい、禁漁時期が設定されるなど多くの課題を抱えています。ならば、天然物に頼らず人工的に養殖しようと、進出した会社があるのです。名前をYALELOとって、現地語で「今日の」という意味だそうです。

湖畔に到着すると見た目にもかなり水位が下がっているのがよくわかりました。最近の雨不足で湖の水位が下がり、特に発電に大きな支障が出ています。湖畔のホテルからボートで魚の飼育ケージのところまで行き、その後稚魚を養殖している陸上のため池を視察しました。担当者によれば、稚魚の飼育に6週間、湖のケージでの飼育に半年かけ、450グラムほどの成魚にして冷蔵保存状態でルサカなどのマーケットに出しているそうです。稚魚から成魚までに育つ割合は40パーセント、年間の出荷量は7千トン、今後はえさ工場の建設、さらに冷凍、加工施設の建設が予定されているとのことでした。



ザンビアは冷凍のティラピアを大量に中国から輸入しており、政府は何とか国産化に努めていますが、現時点ではコスト面で課題があるようです。しかし、養殖業が盛んになれば、外貨の節約ばかりでなく、雇用創出にもつながり、南部アフリカ全体のマーケットをターゲットにすれば良好なビジネスモデルになると思います。日本企業にも進出してほしいものです。

2. カリバノース水力発電所

ザンビアではここ1年ほど深刻な電力不足に見舞われています。電力不足はザンビアだけでなく、多くの南部アフリカ諸国にとっても大きな問題ですが、ザンビアでの状況の悪化は際立っています。もう半年以上一日8時間ほどの計画停電がルサカでは続いています。これは大きな政治問題にもなり、政府は急ピッチで火力発電所の建設を急いだり、太陽光発電の誘致に熱心に取り組んでいます。この電力不足の元凶がカリバダムなのです。



カリバダムはカリバ湖を堰き止め、ザンビア側がノース、ジンバブエ側がサウスの二つの発電所が向かい合っています。我々はザンビア側のノースを視察しました。ダムの水位がかなり下がっていることは肉眼でもわかるほどで、技術者の説明では、あと1.5メートル水位が下がれば発電不能の状態となるとのことでした。ダムの構造を見ると発電用の取水口は水面上にかなり現れており、確かにこれ以上水位が下がれば物理的に水は発電所に入っていないだろうと思われました。

発電所は地下にあり、6基ある発電用タービンのうち稼働していたのは2基だけでした。このため発電量はキャパシティの1065MWにたいし現在は275MWと約4分の1に下がっていました。

ザンビアの主要な発電所は南にあり、ここから電力の大消費地であるコッパーベルト州の銅鉱山の精錬所に送られているため、ルサカはその影響を大きく受けているのです。電力はあらゆる産業の元であるほか、人間の日々の生活にも欠かせないものであり、その影響は大きなものがあります。今後、太陽光発電をはじめとした自然エネルギーが開発されていくことでしょうが、まだまだ時間がかかりそうです。



在ザンビア大使
小井沼紀芳